

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成 25 年 6 月 15 日現在

機関番号：23901

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2009～2012

課題番号：21520271

研究課題名（和文）環大西洋文化における形体的修辞と言語・身体・技術の境界に関する研究

研究課題名（英文） A Study of the Relationship among Language, Body and Technology in Trans-Atlantic Culture from the Viewpoint of Figural Rhetoric

研究代表者

梶原 克教 (KAJIHARA KATSUNORI)

愛知県立大学・外国語学部・准教授

研究者番号：90315862

研究成果の概要（和文）：本研究において発見できたのは、アフリカ系およびカリブ系の文化が修辞法の面において強く示す傾向が、先進的技術革新を通じて広く環大西洋にみられるようになった文化的側面と緊密な親近性を持つという点であった。それは、言語における形体的修辞法と、身体が示す擬態性との、さらにはサンプリングテクノロジー等により可能となった反復性との関連においてである。すなわち、地理的・人種的・民族的に後進的とされるアフリカ・カリブ系の文化が、先進テクノロジーと強い親近性を示し、新たな文化的潮流を生み出していることが立証できたのである。

研究成果の概要（英文）：We have been accustomed to the binary way of thinking that “the advanced and civilized West and savage and uncivilized Africa.” However, when we consider the transatlantic culture including Europe, Africa, and Americas, from the viewpoint of what I call a “figural element” of culture, such binary opposition collapses. For linguistic rhetoric and physical mimicry often found in African and Caribbean culture has something in common with the leading-edge transatlantic and global culture in the sense that they share “figural elements.” Thus the achievement of this study is to have demonstrated a new way of seeing the transatlantic culture.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2009年度	900,000	270,000	1,170,000
2010年度	700,000	210,000	910,000
2011年度	600,000	180,000	780,000
2012年度	500,000	150,000	650,000
年度			
総計	2,700,000	810,000	3,510,000

研究分野：英語圏文学・文化

科研費の分科・細目：文学・英米・英語圏文学

キーワード：カリブ海地域、文化理論、ポストコロニアリズム、表現媒体（メディア）、修辞法

1. 研究開始当初の背景

(1) 従来文化論における傾向

文化論において従来は大きく分けて二つのアプローチがおこなわれてきた。ひとつに、文化的産物を「作品」という創造物として制

作者・作者または集団的主体としての民族の側から理解する美学的・文学的研究がある。もうひとつは、文化的産物の受容のパターンと傾向性をあと追いついてゆく社会学的研究である。

(2) 研究代表者によるこれまでの研究
上記のような従来の研究法に対して、本研究責任者は、2008年度まで「インターフェイス研究」として作者・制作者・民族の側すなわち主体の側からでもなく、また受容する社会の側からでもない、両者の関係を調停し決定付ける「装置」のようなものとして、「表現媒体」と「修辞法」の2種の「インターフェイス」を研究してきた。たとえば、表現形式(媒体)の一つでもある文学ジャンルひとつをとってみると、カリブ海地域在住の作家たちが詩と演劇というジャンルを媒体として利用する傾向が強いのに対し、アメリカ合衆国やイギリスへのカリブ移民たちが小説というジャンルを媒体とする傾向が強いのはなぜかというのが、「表現媒体」に関する問題系である。加えて、アングロ＝サクソン系の文化圏で“we”というところを、ジャマイカのラスタファリアンたちが“I and I”と表現することからもわかるように、カリブ海地域では独自の英語表現が散見され、そのインターフェイスとしての修辞法こそが効果として民族意識を形成していたりする。北アメリカにおけるアフリカ系アメリカ人共同体にも同様の傾向が見られ、たとえば「ダズンズ」や「シグニファイイング」といったアングロ＝サクソン系とは根本的に異なった修辞法が存在する。こうした修辞もやはり、表現内容ではなく媒体という点で、インターフェイスとみなすことができる。

(3) 文化論的に見た研究当初の独自性
本研究課題は(1)の美学的・文学的研究とも社会学的研究とも方法論において異なるのみならず、特定の民族・人種の本質的特性や内面の反映として文化表現をみる「本質主義的」文化研究からの脱却であり、修辞法や表現媒体が「介在すること」によって制作者と受容者(および社会)の双方にもたらす効果を動的・生成的なものとして構築主義的にとらえる点において、国内外ともに多くの例においてカリブ海文化やアフリカ系アメリカ人文化に対して加えられてきた先行研究に、別様のあらたな視点を導入するものである。

2. 研究の目的

(1) 文化のインターフェイスを研究するにあたり、本研究では第一にジル・ドゥルーズが提示している「形体性 the figural」という概念を中心に据え、そこから言語・身体・技術という異なる媒体どうしの関係性を考察することを目的とする。「形体性」とは、「形象化＝比喩 figuration」という言語的意味作用と対置される概念であり、物質的に感覚へと働きかけるゆえに、行為者(芸術家)の意図を受容者(社会)に透明に伝達することが

ないと考えられる。それゆえ「インターフェイスそのもの」を際立たせるものであるとみなしうるがゆえに、「形体性」という視点を研究の中心に据える。

(2) 近年の研究では、文化に対する技術論・情報論的側面からのアプローチが増えてきており、それらは本研究が持つ「インターフェイス」からのアプローチと重複する点が多い。たとえばポール・ヴィリリオは『ネガティヴ・ホライズン—速度と知覚の変容』で、遠方から伝送されてくる像(声、映像)がメディア利用者に到達する際に媒介となるインターフェイス(受話器、画面)の役割に着目しているし、和田伸一郎は『存在論的メディア論』で、<表象すること>の論理とは別の論理の作動領域があるとして、それを「<主体>が制御不能であるようなメディア技術の《ポテンシャル》」と呼んでいる。上記(1)でふれた「形体」の不透明性も、こうした「主体」の意図を括弧に入れるメディア論・情報論的という比較的新しい知見をふまえたうえで、「形体性」という概念を梃子に、文化における修辞的側面と技術論的側面との関係を考察することを2つ目の目的とする。

(3) 先進的な技術を用いた文化的産物の中には、しばしば「後進的」とされるような「擬態」的側面が含まれている。それは声を含む身体的擬態である場合が多い。そうした身体的擬態もやはり、「形体」という側面から考察することで、一見相容れない先進技術との親近性が立証できる可能性がある。それゆえ、身体的擬態性と「形体性」の関係を立証することを第3の目的とする。

3. 研究の方法

本研究は直線的な方向性を持つものではなく、文化における言語と身体と技術がはらむ媒介性(インターフェイス)の問題が横断的に絡み合ったものであるために、それぞれの項目を個別に段階を踏んで探求するというよりも、研究目的の欄に記した(1)(2)(3)の3つの方向を同時的に並行して遂行する。

(1) これまで文学を中心におこなってきた「形体」にまつわる研究を、現代の技術的側面が大きくかわる文化に拡大して検証する。とりわけ現代大衆文化については、カリブ海文化と北アメリカ文化の相互作用を明確にする。具体的には、カリブ系のダブ・ポエムおよびカリブソの修辞法とアフリカ系アメリカ人の「シグニファイイング」「ダズンズ」といった修辞の形体性に焦点を絞って文献収集と考察をおこなう。文献収集については、米国内の図書館を中心に行う。

(2) 技術論・情報論的問題の考察もやはり文献収集と読解・解釈が中心となるが、この項に関しては地域や時代を限定することなく、包括的枠組みで収集・考察をおこなう。具体的には、ポール・ヴィリリオをはじめ、フリードリヒ・キッラー、マーシャル・マクルーゼン、メルロ・ポンティらのメディア論・技術論を中心に研究し、環大西洋文化の具体的産物に応用できる道を探してゆく。本項目については国内での研究を中心とする

(3) 日本国内ではいまだカリブ海域の文化研究は手薄であるため、海外の先進的研究者との交流が必要である。それゆえ、定期的にカリブ文化を対象とした国際学会に参加し発表することで、研究成果を議論の俎上にのせ、方向性を修正してゆく。

4. 研究成果

(1) 資料の収集・調査の成果

①米国での資料収集・調査：

2008年度と2009年度には、コロンビア大学、ニューヨーク市立大学およびニューヨーク公共図書館の黒人文化研究センター(Schomburg Center for Research in Black Culture)で資料の収集を行った。とくに子ニューヨーク公立図書館には、ジャーナル等の文献書類のみならず数多くの視覚・聴覚資料があったために、身体と技術の境界という本研究課題には欠かすことのできない側面という点で研究に大いに役立てる収集成果を得ることができた。それらの資料によって、後述するように、文字文化における「形体」の問題を身体と技術における「構造」と「ずれ」の観点から再考察することが可能になったという点で、資料の収集と調査に関しては重要な成果を得たといえる。

②先進テクノロジーの使用例・使用方法に関する調査：

環大西洋圏に共通して展開される現代大衆文化における身体性・擬態性の特性とサンプリングやCDJやVJの利用といったテクノロジーの活用について、意味表象との関係性の側面から、とりわけサンプラーについて実証的な考察を加えるために、サンプラーを入手し、上記①その他で得た映像資料を参考にしながら、その使用法の特徴を研究した。まずサンプリング規則的なビートやフレーズの機械的な反復であることは従来の研究でも指摘されてきたことだが、経費により入手したサンプラーの実際の使用に加え、アーティストたちの使用例および発言(インタビュー)から、単に機械的な反復には収まらないものであることが判明してきた。つまり、サンプルしたものを単に反復するのではなく、

サンプラー・パッドをたたく際に意図的に音をクオンタイズ(quantize=機械による音のレギュレーション)をしないことで、生じる「ずれ」や「ゆらぎ」を残すということである。さらに、このテクノロジーを介した「ずれ」と「ゆらぎ」は、身体における擬態と反復による「ずれ」と類似することが明らかになった点で、先進テクノロジーの使用例・使用方法に関する調査も充実した成果を残すことができたといえる。

(2) 学会での発表および討議の成果

本研究領域はまだ成熟しておらず、国内外の学会で討議することで研究成果の妥当性を確認してゆく必要があり、国内では2009年、2010年、2011年にシンポジウムやワークショップで発表をおこなった。2010年と2011年には国際学会で発表をおこない、とくにカリブ海域の文化について討議した。

①国内学会：

国内学会では3つの方向で発表・討議をおこなった。第1に、環大西洋を取り巻く文化圏におけるヨーロッパ側に位置するアイルランドについて。アイルランドはヨーロッパの中で唯一植民地化された地域であり、カリブ海地域に先駆けて脱植民地運動が展開された土地である。それゆえ、1960年代以降に脱植民地化された多くのカリブ諸国が抱える問題と文化特性を先取りする形で文学において示した地域である。それゆえ、帝国主義下におけるアイルランドをグローバリゼーション下の現代カリブ地域と類比的にとらえることで、アイルランド文学の特徴とのつながりから、現代のカリブから北米にかけての身体的文化・先進テクノロジーを用いた文化をとらえ直すことが可能となった。第2に、カリブ(西インド諸島)地域においてしばしば用いられる比喩としての「亡霊」を、「形体」という概念が持つ反復性との関係においてワークショップで討議し、図書として出版する成果につながった。そして最後に、先進テクノロジーを用いたメディアを媒介することで、文化がどのように変容するかについてもシンポジウムで議論を練ることができ、論文につながる成果となった。

②国際学会：

2010年にトリニダード・トバゴ共和国で、2011年にキューバ共和国でそれぞれカリブ文学関係の学会にて発表をおこない、上記①にて練り上げた論点を、国内では希少なカリブ文化の専門家たちとあらためて検討し直した。国内の学会では、どうしてもヨーロッパと北米の視点から論じる傾向があるため、このようにカリブに特化した国際学会で発表することにより、多角的に研究内容を精査することが可能になった。

(3) 総合的な成果と展望

本研究課題のもっとも重要な成果は、カリブ海から北アメリカにかけての環大西洋圏文化において、これまで文学において歴史的に指摘されてきたテーマの特徴（いわゆるポスト植民地主義的特徴）が、テクノロジーや身体性の観点からとらえ直すことによって、テーマ(内容)とは別に表現媒体を含む形式的特徴における相関性を保持していることが発見できた点である。そのように、言語、身体、技術をつなぐカギとなったのが、「形体性」という概念である。なぜ「形体性」が異なる3つの表現媒体をつなぐことができたのかというと、それによって表現の主体と受容の主体という、それまでの芸術・文化における中心的結節点から逃れることができたからである。以下、それぞれの相関性を具体的に記し、最後に今後の展望について言及する。

①言語と先端技術と声：

従来、アフリカ系およびそれと同一分類になることもあるカリブ系の文化伝統は、いわゆる西洋のそれに対して後進的で「野蛮」「未開」であるとされてきたが、20世紀のおわりから21世紀にかけてのテクノロジー上の変化/メディア環境の変化を経たのちも、アフリカ系・カリブ系文化の傾向性が表現形式の側面において継承されているということが明確になった。それは、サンプリングや規則的ビートやクリック音などの反復に乗せられる、身体としての声をもたらずレや揺らぎという問題である。つまり、19-20世紀におけるカリブ文学における民話の語り直しとその口承性が、同じ物語内容を以下に異なる形で(ずらしながら)語るかという点に重点が置かれていたことを考慮するならば、ヒップホップやレゲエやソカという環大西洋圏において突出してみられる、先端技術を駆使した現代音楽文化における反復性と、民話の語り直しは接ぎ木が可能であることが証明できた。

②身体と言語的修辭：

ニューオーリンズからアンティル諸島にかけての北中米カリブにおける文学的意匠として、時間的定点と空間的定点における「亡霊的」な反復性の表象が頻出する点が発見され、それをラフカディオ・ハーンという作家の残した文書を中心に再考すると同時に、さらにアイルランドのW. B. イェイツの作品にみられる「亡霊的」な反復に関する考察を加えることで、より広い環大西洋地域に共通した修辭的特徴を立証してゆき、「環大西洋の亡霊たち」(松本昇ほか(編)『亡霊のアメリカ文学 - 豊穡なる空間』所収)という論文のかたちに結実させた。当該論文で証明したのは、「亡霊」という言語的修辭が、主体の身体に影のように取り付く存在を指し示しているという点と、実体としてひとつである身体に

複数としての主体性が与えられる環大西洋文化の特質は、複数の主体の要請に基づいているという点であった。このようにアイルランドから北米そしてカリブに連なる広域における修辭的共通性とその意味を発見できた点で、本研究は意義のある成果を残せた。

③今後の展望：

まず、本研究が最終的に踏み込めなかったのは、ダンスなどのパフォーマンスの領域についてである。すなわち、身体の問題については、やや抽象的な議論に終始してしまった点が不十分であった。それゆえ、今後はダンスを含むより具体●身体所作の分析が必要である。しかし、上記①②のような言語的修辭と身体にまつわる問題が、現代音楽においてみられるひとつの傾向との間に持つ接点を見いだした点においては、本研究課題は新たな文化論の可能性を示しているといえる。たとえば、濱瀬元彦が指摘している「下方倍音領域」は、「ブルーノート」といった現代のブラックミュージックに特有な「ずれ」や「揺らぎ」を特徴づけるものであるが、それは、上記の「亡霊的なもの」同様に、実在しない虚数体系を用いることによって説明可能なのである。このように、現代文化を特徴づけてきた環大西洋文化にみられる特徴が、言語文化、音楽といった表現媒体(メディア)を異にするものの間でも、共通した根を持つことが明らかになってきた点において、本研究は今後の環大西洋文化研究の進展においても新たな可能性を示している。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計2件)

①梶原克教、「映像媒体におけるリアリティの諸相」、*MULBERRY*、第59号、pp. 29-44、2010年。査読なし。

②梶原克教、“Greek Elements in the Trinidadian Cityscape”、*MULBERRY*、第60号、pp. 1-12、2011年。査読なし。

[学会発表] (計5件)

①梶原克教、「グローバリゼーション途中の2極化の問題 — W. B. Yeats の場合」(日本英文学会中部支部 第61回大会シンポジウム講師)、2009年10月18日、於愛知学院大学。

②梶原克教、「西インド諸島における亡霊的なもの」(日本アメリカ文学会 第49回全国大会ワークショップ)、2010年10月9日、於立正大学。

③梶原克教、“Representation of Antillean History and Landscape”、第11回国際カリブ文学会議 (ICCL 11th International

Conference on Caribbean Literature)、2010年11月3日、於西インド大学、トリニダード・トバゴ共和国。

④梶原克教、「視聴覚メディアにおける語りのポジション」(日本英文学会中部支部第63回大会シンポジウム「語りの<新しい>可能性」講師)、2011年10月30日、於名古屋大学。

⑤梶原克教、“Ghostlike Images in the Caribbean History and Landscape”、第11回国際カリブ文学会議 (ICCL 12th International Conference on Caribbean Literature)、2011年11月3日、於ホテル・ナショナル、キューバ共和国。

〔図書〕(計1件)

梶原克教、「環大西洋の亡霊たち」、松本昇ほか(編)『亡霊のアメリカ文学・豊穡なる空間』(国文社)、2012年。総402ページ中 pp. 196-210。

6. 研究組織

(1) 研究代表者

梶原 克教 (KAJIHARA KATSUNORI)
愛知県立大学・外国語学部・准教授
研究者番号：90315862